

粘土のような身体：歪められた像

東京芸術大学博士後期課程美術研究科彫刻専攻
1318913 根本祐杜

論文要旨

人間の像は無数に存在する。この社会に存在している人の分だけその視点、像が1つの地球という世界にある。本論文は彫刻という制作手段を用いてさまざまな人だったり人のようなものを制作してきた作者が、全ての作品を人体像として認知して、私が日々生活している中で起こった制作にまつわるエピソードから、私の作品を解釈しようと試みた制作論である。制作と生活の連続性の中にある私の作品を1つの人体像から発生するエピソードを主体とし、それを数珠繋ぎのように繋げた。

彫刻はこの世界に存在し形を持って現れる強いメディアであり、古来より残る彫刻作品は過去の表現でもあり未来に向かって照射されている物体でもある。今、私が生きているこの世界は最新の世界でもあり、それは時が経てば過去のもとなる。人間は歳をとりやがてその存在が消える。しかし彫刻という物体は時間が経ち、劣化して変容することはあっても、この世界に存在を確認することができる。私は現代に生きる一人の作家として自分が持つイメージに有用性を持たせたいという思考のもと、今まで人体像を立ち上げてきたように思う。それは自身の生活から連続する人間像であり、その人物もしくはイメージ自体は、私の労働環境時の職場の同僚であったり、夢の中に度々出現した者、ドローイングの行為を重ねていく上で頻繁に描いていた記号だったりさまざまなベクトルでの人のイメージが存在する。

ここで語られるのはごく個人的な日常の中での生活の連続にある人間像でありそこには私も含まれる。その人物像やイメージを彫刻という物体に代入し立ち上げようとする心の動きは一体どこから来るのかを作品付近にまつわる経験や思考から考えていく。

私の作品を考える上で、元々ある像や社会風景を脱線させ、像自体を歪めるような態度を持ちオリジナルと認識される事象であったり造形にオーバーラップさせる心の動きがある。当たり前前に享受しているオフィシャルな像を異化し彫刻という強いメディアで制作する。それは社会によってつくられていく身体でもあるし、像という輪郭、彫刻というアカデミックな権威性のある表現等様々である。フォーマットに準じ歪められた像は、私でもあるし他者でもあって、決められた視点や既にある既成概念を崩し再提示される。

私の制作の姿勢として2つの姿勢が混在している。造形的な部分で歪められた人体を作りたいという欲求、何かしらの制限や制度の中で生じる正像に対して、その制限を引き受けながら制度を転用し人物像を立ち上げようとする姿勢。ともに造形面に関して言えば完全に崩れた形態ではなく躯体や人体の輪郭を崩さず具象でも抽象でもない人体であり、制度内というフォーマットを転用する動きは、その場所やルールを完全に否定することをせず、その場所で逃走を試みようとする体験や人物像に面白さを感じ、形作る。

本論文では自己像と他者像を章ごとに分け、人体像が生成されるプロセスを記述する。

1-1では自己像の発生について3・11後に社会的に作られた身体の違和感を元に、1-2で地元の海に漂うことによって身体を彫刻の素材の粘土のように扱い、自然を身体に代入し得られるスケールについて述べる。1-3では自身が環境設定した舞台において自己像を成立させる。キーンホルツとシーガルのつくる舞台をフレームとして考え記述し、自作「アートオーディション」について考察する。

1-4ではアテネで発見した公共空間に現れたレストランから自宅「ソフトハウス」の展示において見出された自宅の家を不特定多数の他者に開放したことにより立ち上がる人物像を、他者を内包する身体として、棒人間の彫刻「ナッシング・アット・オールマン」と併せて記述。

2章、2-1では他者像という括りで、チョコレート工場で働いていた時にあった労働時に出会った人物「ホウさん」から制度内で逸脱する人物をチョコレートの首像にした経験を述べる。

2-2では、オリジナルと言われる像から発生する偽物というフォーマットに基づいた像について自分の銅像を自分で建てた「根本祐杜先生像」について述べる。2-3では銅像という権力を人物像に集約させる性質を持つ像から、男性器であるペニスについて、信仰や政治的アクティビズムを持ったシンボルとしてのペニスを参照しながら、透明な身体を持つペニスについて論述する。2-4では人類全員が持つ造形物として普遍的存在の他者としてうんこを考察し、自作「NEW SHIT PRESIDENT」なる巨大な山のようなうんこに埋まっている禿頭のおじさんを自著「うんこおじさんのぼうけん」や自身の個展「パーフェクト・オフィス」を参照しうんこおじさんとはなんであったのかを記述する。

3章ではフランシス・ベーコンの造形姿勢から歪められた像をキーワードに粘土という形の定まらない物質を用いて作られた人物像たちについて博士提出作品を記述する。3-1ではアテネのアパートにコロナウイルスによって軟禁状態にされた経験から生まれた棒人間の彫刻「ナッシング・アット・オールマン」について10秒で完結するはずの棒人間を彫刻というメディアに落とし込んだときに生じる像とのやりとりを記述する。3-2「発掘された人」では土の中に埋まっている人物を作者の脳内と土の中から同時に発掘し、形作られる巨大な人物像について記述。3-3では「発掘された人」から続いて土に人型の穴を描いて大地をキャンパスとする、5つの面で構成されいくつかの人物のイメージを構成し組み合わせた「五面人体像」について記述する。

おわりにでは、生活の中で発見する事象に彫刻という形を与え、この現実存在させる。それは抑圧された身体の中にプリミティブな人間性を発掘する行為であり、生活の視点で見出された自己像でもあり他者像は、粘土のような身体であり形の定まらない歪められた像であったと結論付けた。